

高野山親王院藏 『惠心僧都義読』 付載

『仮名の声』 について

本書については、すでに本誌二十三号で、『いろはうた』の「アセント」という小論をものにしたあとに追記としてふれたことがあった（同誌八六ページ）。その後、なおよくかんがえたいうえで、とおもいながら放置してあったが、拙考はともかく、もしなんとか利用できるかたでもあればとおもって、若干の解説、私見を附して、紹介することとした。

ここで紹介しようというのは、高野山親王院藏『惠心僧都義読』のあとにかきつけられた一丁半の部分で、原本では、このあとに「いろはうたの声点附図」（同上八六ページに）と、漢数字の声点とで一丁、またそのあとに「*shiki*」（梵字。悉曇の意であろう。）鐘谷抄云」として一丁の書写があり、おくがきとして

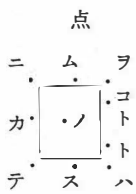
元祿十三庚辰三月廿五日書之
とある。このおくがきは、おそらくこの本全部のものであろうから、いま紹介しようとする部分も、元祿十三年以前につくられたものであるという以上のことは、ここからはわからない。
さて、いま紹介しようという『仮名の声』（仮題）の全文はつぎのとおりである。

一 仮名声者（随カ）遂便読之故不 一定事歟
然ト云ヘ 天爾波仁用分注之

- ラ 上声也又平声ニ 読事有之威ヲトヨム等也是ハ希之事也
- レ 上声也又平声也コトニフレテ云時也
- ト 平声也
- ハ 上声也
- ム 上声也
- ノ 上声平声ニ 通也上声ノ字ニ 用時ハ上声也諸經ノトヨム平声ノ字ニヨメハ平声也歌中等也
- ス 上声也又平声用事アリミヘスト読時ノ事也
- ニ 上声也
- カ 上声濁清共ニ上ニ通也秘之中歌之中等皆上声也歌カ秘カトヨム同上声也
- テ 先上声也歌テ候カト云時ハ平声也
- スルハ 上声也
- シテ 上声也又シテト云時ハテハ平声也
- アリ 有ノ字訓ハ平声也
- セン 上声也
- セス 上声也平声也
- イカン 上ノ一字上声也下二字ハ平声也
- ソレハ 上声也
- ナシ 平声也
- イフカシハ 平余ハ上声也
- ヲモウ 初ハ上ニハ平也
- ナカ 平也上也中

ウチ 上也平也内
 ホカ 平也上声也
 セハ 上ハ上下ハ平也

この「ヲコトトハムノスニカテ」というのが、ヲコト点図中、経



を、みぎからたてに順によんだものである

ことは一見してあきらかである。しかも、ただ単に最初のことばにあるごとく、「てにをは」をだすために、便宜点図の順をかりもちいたというだけでなく、漢文訓読というものとふかい関係があるとおもわれるが、それについては次第にあきらかになつていくであらう。

その最初のことばは、かなのアクセントは、そのときどきの便にしたがってよむものであるから一定ではない、ということは大前提としてのべたもので、かなを文字としてみるかぎりただししい態度とおもう。しかし、てにをはとなれば、これは語であるから、ある一定のアクセントをもつこともありうる。そこでそれぞれに平声上声を注しようというのである。勿論、あとの半分は、てにをはではないものであるが、点図中にみえる語であったり、漢文訓読の常用語であったりするから、編者は、おもいつくまますに列記したものであらう。

まず助詞のアクセントという問題であるが、これについては築

島裕氏「浄弁本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」(『国語学』)における調査がもっとも信憑できるわけであるから、それと対比してみよう。

本書 浄弁本拾遺集(同論文七〇〜)

ヲ	上	上六例	平なし
ト	平	平十例	上なし
ハ	上	上十一例	平一例
ノ	平・上	平と上	
ニ	上	上十二例	平二例
カ	上	上四例	平なし
テ	上・平	上十四例	平一例

こうしてみると、築島氏の調査とほとんど一致する結果がえられる。ただし「ノ」について築島氏は、この助詞だけが、まえにくる語のかたによって、アクセントがかわると推定され、その点において、本書の記述と一致するが、ただ築島氏の調査は、まえにくる語のかたの分類がさらにくわしい(同論文)から、本資料の素朴なのと比較にはならないが、概括的には本書の記述の様なことがいえないわけでもない。ともかく、築島氏の調査は、古人の(いつの時代かは未定であるが)主観的な内省記録とも一致するといふ立派な業績であつて、まことに敬服にあたいするものである。つぎに、その他の語であるが、『類聚名義抄』『補忘記』の二書に検するに、どちらかと相違するものはつぎの四語のみである。その他のものは、『類聚名義抄』とみな一致し、『補忘記』に記載のあるものは、それとも(つまり三書とも)一致するものであ

ている。ここにあげられている例に関するかぎり、そのかな「仁」「波」「須」「爾」は、助詞としてみれば、本資料『仮名の声』とまったくおなじアクセントをとっている。つぎに、「仮名の高下を知る歌」というものを二首あげているが、その問題になつていかなるかな於(を)・仁(に)・波(は)・天(て)・登(と)も、本資料とおなじアクセントをしめすものとかがえられ、世(せ)・志(し)。(この二字がちいさくかかれてゐるのは佐に準ずるものという意か)・須(す)は、サ変の活用としてまた一致する。不・津・俱・知・機は入声をしめすかなであるから、うえのかなとむすびついて入声となるとき、その字のアクセントとしては低であらうから、「ひくいかな」となつたのであらう。第二番めうた、「のはつるる、とはゆきちごふ」というのは、「の」が上字の声につれてかわるといふことと一致し、「と」は上字と反対の声になるといふ点だけはまったくあたらしい説である。こうしてみると、この『補忘記』の説も、『仮名の声』の説とまず大體おなじ様な事実をのべているものとみることが出来る。そうすると、この「仮名」というのは、漢文でかくばあいにおいて漢字からもれた部分、つまりかなでかくものといふことで、語と文字とが表裏一体をなしている用語であるといふことになる。かつてわたくしは、おなじ『補忘記』の、前引用個所のつぎに、

一 詞字ハ不依_レ仮名ノ高下ニ以_テ洛陽之詞_ニ為_シ正可_レ習_シ之

とある文をとりあげ、この「仮名」を和語と解し、「詞」を漢語と解して、先学の金田一春彦氏、服部四郎博士の説を非としたことがあつた(「定家かなづかいと契沖かなづかい」、『続日本文法

講座』2)、「国語の音韻の変遷」(国語教育のための国語講座) 2が、こ

こにつつしんで旧私説を訂正したい。つまりこの文は、漢字でかかれる語は、そのしたにぐる助詞などの「仮名」のアクセントによつてそのアクセントが影響されることはない。京都語のアクセントをもつてただしいとしてならうべきである。とても解すべきものであらうか。

なお、その「詞」と、「名目」(よみくせ)との関係、ひいては、『補忘記』のことばの時処の問題はまたのこるわけであるが、いまはそこまでかんがええない。

(馬淵和夫)